

伊野小学校の再編を考える検討委員会

学校・地域視察の報告

2013,12,12

文責：検討委員会会長 多久和祥司

1 視察の概要

伊野小学校再編検討委員会は、11月23日（土）、奥出雲町立亀嵩小学校と大田市温泉津町井田地区の視察を行った。

〈視察の目的〉

- ①複式学級のある小規模校でありながら存続している学校の現状と課題をさぐる。
- ②学校が無くなった地域で、統廃合に至る経過と現状を聞く。
- ③視察で得た情報をもとに、伊野小学校再編について検討課題をしばりこむ。

〈参加者〉

伊野小再編検討委員会 16人

〈対応してくださった方〉

亀嵩小学校：安部茂寿校長 大谷淳治教頭 PTA会長 PTA副会長（2人）

井田まちづくりセンター：大田市教育委員会総務部堀亨人権推進課長 大田市教育委員会総務課藤原和弘課長補佐 井田まちづくりセンター長厚朴邦広 温泉津まちづくりセンター長河原秀之 NPO法人どんぐりの家理事長泉原省三

2 亀嵩小学校

（1）学校と地域の概要

児童数 36人、3・4年生と5・6年生が複式学級になっている。小規模校にもかかわらず、「学校の統廃合はしない」という町政方針の下、3年前に総工費12億円の完全木造校舎が完成し、昨年、しまね景観賞を受賞した。亀嵩小学校の10年後の児童数は30人前後と推定されている。亀嵩小学校の近くに同じ亀嵩地区（旧亀嵩村）に属する高田小学校（児童数13人）があるが、存続している。

奥出雲町内にある11の小学校のうち、複式学級があるのは6校。40年以上にわたって学校数に変化はない。井上町長は「学校は地域の文化センター。消防団と同じで地域に密着したもの」と、学校の統廃合はしないと明言している。

（2）聞き取りの概要

①複式学級と学習

算数と書写は「わり方式」、その他は「AB年度方式」で行っている。学力上の問題はまったくない。複式教育の良さが強調されるような取組を行っている。自分で勉強する力を育てることや、ペアで相談するなどして子供同士の関わりを大事にした学びを展開している。保護者も学力について心配をしていない。

②社会性・協調性

亀嵩小学校も含めて7つの小学校の児童が仁多中学校（学級数8）に進学する。授業のやり方が変わったり学習集団が大きくなったりするために起きる「中1ギャップ」を解消しようと、小5の合同キャンプ、合同の修学旅行、奥出雲町全小学校が参加する「た

たら体験」などを企画し、小学校段階から仲間づくり・集団作りに努めた結果、中学校の不登校が減っただけでなく、小・中の接続が非常にうまくいき始めた。

③小規模校の職員数

小規模校は職員数も少ないので教職員の負担が大きくなるのではないか。音楽など専門の教師を確保することも難しくなるのではないか。これについて学校側から次のような回答があった。確かに教師一人ひとりの負担は大きくなるが、教師の幅を広げるチャンスでもある。専門の教師を確保できない場合は地域から外部講師を招いている。地域の人材とその能力を学校教育に結集することが大事だ。

④小規模校の子ども集団づくり

わずか36人の児童なので「36人が家族」と考えている。クラスごとの学級朝礼はやめて、幼稚園児も含めて「全校朝の会」にしている。学年を超えた絆ができるのが小規模校の魅力。「子供が3人いるが、3人とも小学校が大好きだ。放課後、高学年の友だちのところ遊びに行ったりして学年を超えた友だち関係をつくっている」(PTA会長)

⑤単式・複式を繰り返す学年

単式・複式を繰り返す学年について保護者や子供に不安はないのか。保護者が不安になることについては、説明会を開いて不安を払拭するように努めている。子供は、複式で異学年と一緒に勉強することでクラス替えのような新鮮さを感じているようで、問題はないように感じる。

⑥小規模校のPTA活動

亀嵩小学校のP会員数は24人。少ない会員でPTA活動を運営することに困難はないのか。

校庭の草取りなどは大変なので自治会や消防団に協力をお願いしている。昨年から年5回の弁当の日を設けた。「ふるさと弁当」や「バランス弁当」などを、買い出しも含めて、親の手を借りずに子供だけでつくってきて、学校で会食する試みだ。校長やPTA会長も自作弁当をつくってきて子供と一緒に会食を楽しんでいる。

年に4回、「ママカメ会」といってお母さん達が集まる女子会を開いて、交流を深めている。昨年、亀嵩小学校PTAは文科省から「優良PTA活動文部科学大臣賞」を贈られた。特別なことを大きな負担をかけてやっているのではない。子供がかわいいと思ってやっている活動で、自分たちも楽しんでいる。

⑦放課後の児童

放課後、子供教室を開設し、4時～4時半まで専任教師がつくようにしている。来年度から認定こども園に移行する予定(有料)。

⑧小さな学校の大きな魅力

へき地教育、複式教育だからこそできることをどんどんやっている。小さいからこそできる可能性を追求している。考え方・発想の転換が大事だ。

学校の存在意義は何か、と考えることも重要。学校が塾化してはいけない。学校と地域の双方向の活動をつくりだすことで互いが元気になることに努めている。体力向上推進モデル校に指定されている亀嵩小は昨年「子どもマラソン」(月1回)を始めた。子供たちが町内を走ると、地域の人たちが「かめっ子」のキャラクター旗を振って声援

してくれるようになった。旗は全戸に配布したものだ。子供の育ちを地域の人たちが見守り支えている。学校やPTAの活動によって「学校に出入りしやすくなった」という地域の声が聞かれるようになった。

⑨スポーツ

昭和57年の国体以来、奥出雲町の伝統スポーツとなったホッケーは学校で指導しているが、その他のスポーツ（野球、サッカー、バレー、剣道）は町単位のスポ小で指導している。亀嵩地区で盛んな剣道は、地域の指導者が学校に入って指導している。

⑩通学

すべての児童が徒歩通学。一番遠いところで3km。積雪の多い冬は路線バスを利用する子供もいる。

3 井田まちづくりセンター

(1) 地域と学校の概要

人口650人ほどの地域で旧井田小学校は温泉津市街地から約5kmの地点にある。平成10年に小学校・幼稚園・公民館併設の学校として「子供と地域の人々が出会う場」をコンセプトに建築された。こだわりの設計もいくつかあり、校舎内にある雨天対応ゲートボール場もその1つである。

平成23年4月、旧温泉津小、旧湯里小、旧井田小、旧福波小の4校が統合し、福波小校舎を利用して新温泉津小学校が開校した。統合前年の各小学校の児童数は温泉津小53人、井田小23人、湯里小15人、福波小25人、計114人であった。今後も児童数は減り続け、平成35年には96人と推定されている。

旧井田小学校校舎は現在、1階は公民館と幼稚園、2階はデイサービスとして利用されている。

(2) 聞き取りの概要

①学校再編の経緯

平成18年、大田市の小学生・中学生の数が昭和61年度比でそれぞれ49%、45%に減少したことを踏まえ、大田市教委は「学校再編基本計画」を策定した。平成20年、大田市は「再編実施計画」を策定し関係団体との協議を開始した。

温泉津小校区では複式教育に危機感を抱いて子供を他の中学校区の小学校に進学させる保護者が出たり、校舎の耐震化が不備であることがわかったりして、統合やむなしという流れになった。

井田地区では「複式でも学力的な問題点はない。学校を残したい」など、統合に反対の声も強かったが、流れが変わったのは、統合に反対していた母親が「僕はずっとクラスの中で男の子1人なの？」という息子の言葉を紹介したときからだ。統合か否かの意思決定は井田小PTAを中心に進められ、再編実施計画の提案から1年を待たずして統合を決定した。

②大田市学校統廃合の基準

統廃合に際して新校舎の建築は行わない。既設の校舎を利用する。望ましい学級人数は15人以上と考えている。小規模校（複式）のデメリットは、他者との交流が少

なく社会性が育たないという点にある。(大田市教委)

③体育祭や文化祭

地域の学校が無くなったことによって地域の諸活動に大きな困難をきたしていることはない。体育祭や文化祭がなくなるのではないかという心配の声もあったが、存続している。ただし、以前のように全校児童が参加という形はとれないので、体育祭には4年生以上の児童に役員で参加してもらっている。体育祭の案内文書を学校で配布してもらうことができなくなったので、「子ども会」を通して配布している。教師が参加しなくなったので、当初、放送設備の使い方がわからないなどの混乱があった。文化祭には、子ども会有志という形で参加してもらっている。学校行事に参加という形から地域行事への参加という形に変わってきた。

④施設の管理

校舎や校庭の維持管理に苦勞している。年1回、ボランティアを募って校舎内の掃除や校庭の草取りを行っている。130人以上が集まってくれる。旧温泉津小校舎の電気水道代についても困っている。廃校になっても維持費はかかる。

⑤施設の修繕

施設の老朽化に伴って生じる修繕や改修はどうなるのか。幼稚園、小学校、公民館が併設された施設なので、修繕を要する箇所によって市の担当課が異なるのが悩みだ。

⑥地域を知る・地域の文化を継承する教育

以前のように子どもたちが地域に出かけて学ぶ機会は減った。温泉津小学校に「地域に出かける機会を増やしてほしい」とお願いしている。温泉津小学校では学校全体の学習計画(カリキュラム)に各学年の地域学習を盛り込んでいる。低学年の環境学習は〇〇地区で、福祉についての学習は〇〇地区で、というように。井田地区では子供たちが地域で学び成長してもらうため、夏休みに、子ども参加企画をつくっている。

⑦遠距離通学

合併に伴い、井田地区の子どもたちは30~40分かけて温泉津小学校にバス通学している。石見交通と契約して下校便は低学年用と高学年用の2便を「スクールバス」運用している(無料)が、一般の乗客も乗ることができる。

バス通学になって子供の姿を見なくなった、という声が聞こえてくるようになった。バス通学に伴う体力低下対策として学校も意識的に走らせる努力を行っている。

来年度、温泉津中と仁摩中が統合し、仁摩中校舎を利用して大田西中学校が開校する。井田地区からの通学距離はさらに伸びる。

⑧放課後の保育

新温泉津小のある福波地区に児童クラブ(小3まで)をつくった。まちづくりセンターの1室を利用しているが、有資格者の確保に悩んでいる。

⑨スポーツ

温泉津町全体でスポ小を組織している。

⑩定住化対策と学校

統合前から通勤のきびしさ故に地区外に出て行く人があった。Uターン親子もいるが、人口増は望めない。大田市内旧富山小校区では、学校がなくなったので地区外に家を建てた人が複数いる。